

「ほどけてゆくからだへの12のポエトリー」

白い、地面に影がうごめいている。

地面は盛り上がり、次第にその下にいる存在が物質としての存在を増してくる。

#### 1. 記憶の情景

背に触れるシーツのやわらかな感触、このままずっと沈み込んでいきたくなくなるような甘い誘惑に溺れそうになりながら私は時計を見つめている。

#### 2. 遊離している肉体と意識。

あてもなく歩いて漂い、次第に意識が戻ってきてまた肉体に癒着してくれることを望む。

#### 3. 装うこと。うそをつかすにはいられないこと。人をかどわかしていること。

ありたい自分の姿。自分ですら自分に惑わされているよう。

#### 4. いつまでたっても頭から出て行ってくれないあなたを、必死に追いだそうとするのだがけれど、そうしようとすればするほどあなたはどんどん目前に迫ってくる。

#### 5. ものは簡単に捨てられても、今まで続いてきた、積み重ねてきた人間と人間の関係、生活、記憶は捨てることなどできない。どんなに遠くに捨てたと思っても、手ひどく葬ったと思ってもどんなにしてか、またいつの間にかするりと手元に戻ってきてしまっている。そのくせ、自分が昨日食べたものなどはまるで覚えていない。

#### 6. 道はどこまでも続いていた。もう私はすっかり待ちくたびれていた。

いまさらどこかに行こうかという気にもなれない。かといって立ち止まっているのはとても不安だ。もやに覆いつぶされてしまいそうで、なんとか右足を前に出そうとする。

#### 7. 動かない。いや、動いているのかもしれないが少なくともそう感じる事が出来ない。

感覚が麻痺しているのか、或いは・・・

ああ、また意識が浮遊していきそうだ。

でも今度は、ここに自分の肉体があるのは、恐ろしいほど鮮明にはつきりと感ずることが出来る。自分の肉体の存在に恐怖する。しかし、ぼつんとただそれだけになっってしまったようなので。どうにも、周りに存在するはずの世界、世界の中にあるものからまったく切り離されてしまったようだ。

そんなはずないというのに、確かに、自分は世界の中にこうしてたたずんでいるでは

ないか。それは疑いようなない真実であるはずだ。なのに、私は今自分の肉体と世界とのあるべき調和を感じることが出来ない。

まるで、ここに自分があることを世界の方から拒否されているようである。

8. まるまって眠っている人のような、小麦が詰まって袋のような、物言わぬ岩のようななにかしろいものが等間隔で並んでいる。

9. 今までないがしろにしてきたものが、静かに訴えかけてきているのを私は感じていた。気がつけば、神に対する懺悔であるかのように頭を垂れていた。

10. いとしさとは、ふとした瞬間にこみあげてくるものなだと、私はぼんやりと頭の隅で実感する。逃げも隠れもできないこの目の前の現実の中で、手に触れようがない、しかし確かにそこに在るもの。簡単に手放すことも出来ようが、どこかこびりついて離れがたい、尾を引くようなものだった。

11. 時間を手に中でもてあそんでいる。

幼子が口の中に含んだ食べ物を何度もつぶし、ころがしているように。反復し、その行為だけに夢中になっている。何も考えず、目の前の行為だけを、純粹に。

12. おそろしく冷たい皮膚が絡みつく。それは私から私を奪い去ろうとするようで、抗ってみるものの、息が吐き出されるだけだ。